

Title	「聞き取り」としてのセクシュアリティ : 日本論理学会におけるその位置
Author(s)	栗田, 隆子
Citation	臨床哲学のメチエ. 4 P.27-P.29
Issue Date	1999
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/7668">http://hdl.handle.net/11094/7668</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 「聞き取り」としてのセクシュアリティ ——日本倫理学会におけるその位置—— セクシュアリティ研究会から

栗田隆子

大阪大学、吹田キャンパスで開催された「日本倫理学会」(以下略して「日倫」とする)の二日目に「ジェンダーとセクシュアリティ」というテーマで発表の場が設けられた。ここで問題にしたいことは、日倫という「場」でセクシュアリティ(ジェンダー)について発表するという意味についてである。それは、社会学や心理学のフィールドではなくなぜ倫理学にセクシュアリティが入り込んできたのか?という問いでもある。それに対して、時代の流れという答えではなく、「日倫」という場をもまたひとつの現場として捉え、そこでセクシュアリティがいかに扱われるのかということ、その意味を考えてゆきたい。

つまりセクシュアリティは学問で取り上げる「べき」という捉え方ではなく、「日倫」というひとつの「場」で取り扱われたセクシュアリティのあり方を捉えようという試みである。

分科会でのパネリストは大阪府立大学所属の森岡正博氏と東京都立大学所属の江原由美子氏であった。森岡氏の発表は「男性がフェミニズムの問いかけをどう受け取るか」という題目で行われた。フェミニズムの主張とは、もはや一枚岩として語れるものではなく、この時代においては男女とい

う違いでなく「戦うもの(戦おうとするもの、と会場で言い直す場面があったが)と戦わないもの」との違いだけがあると主張した。その違いは性差によるものでなく最終的な主体としての「個」による違いであるとし、その「個」からはじめることによって、性(セクシュアリティ・ジェンダー)についての「対話」が生まれると主張した。

他方、江原氏の発表は社会学の立場から、「ジェンダー」と「性支配」--「構造と実践」の観点から という題目で発表された。「個」の立場から性を語ることの可能性を説くよりも、社会構造のなかにマクロ・ミクロのさまざまなレベルで「男女」という「ジェンダー」そして、その性の「非対称性」がすでに存在してしまっているということ、そして森岡氏の主張するようなその語るべきはずの主体である「個人」もまた、それこそ個々の身体、感情(無意識、とでも表現できるような)のレベルでその社会構造の中にあるジェンダーバイアスに色づけられた「実践」を繰り返しており、繰り返すことでそのジェンダー構造を強化してしまう状況があることを説明した。

この二人の発表において通奏低音として流れていた問題とはそれぞれの、わたしやあなたが「主体」として、「セクシュアリ

ティを語る」とはということなのかという問題であった。その問題とは、セクシュアリティに臨む哲学研究会のなかでも何度も取り上げられてきたことであった。すなわち、「誰が誰に向かって」話し、聞くのかということが、つねにセクシュアリティを語る際には問われること、またその話しをすることにより、人間関係においていかなる磁場が生まれるのかを追わなければならないということでもある。

さて、以上のことを踏まえつつ「日倫」というひとつの〈場〉でセクシュアリティのあり方を捉える意味について考察してゆきたいと思う。

私は会場のやりとりを聞いていてかなりの「不安」を感じた。それは、さきほどの問題提起(セクシュアリティについて主体としてどう語るのかという問題)の延長線としてセクシュアリティについて女性はあまり語ることがなかったのではないか、という森岡氏の指摘に対し、江原氏が、セクシュアリティを語っている・いないを一体だれが決めているのか、という反駁をした

うえで、具体例として、レイプをされたある女性がその暴力的な性行為に際し「感じてしまう」身体に対して憎しみを抱く場合があるとし、そのような女性に対し性的主体としてセクシュアリティを語るということをもしくは語るべきであると要求することは不当なのではないかという発言を行った時に、であった。これらの発言から見られるように、発表の中盤は森岡氏から提示された男性の側の性的ファンタジーについての発言など、ジェンダーというよりセクシュアリティについての議論が活発になされていた。その直後に、それらの発言を受けてフロアーから「もっと、婦人公論4冊(注:おそらく性的な「体験談」としてこの比喩がなされたと思われる)を読んだような話ではなく、セクシュアリティの話をするときには政治や戦争等、構造的な視点を持って語るべきではないか」という意見が出たのだった。

さて、私自身がこのやりとりのなかで感じた「不安」とは何か。それはセクシュアリティについて「誰が誰に向かって」語るのか、という問題がこの「日倫」という〈場〉でも独特の仕方で噴出したように感じられたからである。あの日倫という〈場〉では、セクシュアリティを語る際に生じる磁場の領域があいまいになる、もしくはならざるをえなくなるのではないかという疑念が生まれたのだ。

具体的に私自身についていえば江原氏の話に自分を仮託して聞いている側面があった。つまり彼女の話がどのように受け取られるのか、その話しの行方、宛先が気がかりであった。それがはっきりしなければ、彼女の話すらある種の性的幻想(つまり、その女性の気持ちの痛みを捨象して「からだは、やっぱり感じるんだろう」とでもいうような)を無批判に支えるものとして、つまりは(江原氏が指摘するような)既存

の「構造」のもとでの反復された「実践」のパターンの一つとして聞き取られるおそれがあると感じたのである。江原氏の話、または森岡氏の話には、なぜか思いがけない場で性について語る、もしくは「聞かされる」という印象があった。あの場はまさに「セクシュアリティについて語る場」としての位置づけがなされているにもかかわらず、である。「話してほしい」という期待感もあればこそ「話がなされてしまうのか」という不安感も同時に強く生まれ、それらがなまぜになっていた。その両方の感覚が -- 強いていえばやはり不安の方が強かったが -- どこから出てきたか。それは個人の「体験談」がこの「日倫」ではどういう位置づけになるのか、という問題なのではないか。

分科会とはテーマに沿ってある事柄が語られる。それは一見「中立」的な、個々人の利害や感情を出さずにすむための方策、と思われる。しかしセクシュアリティについて「真摯」に語ろうとすればするほど、それは(婦人公論的、と会場から発言されたような)「体験談」に近づいていく部分がある。しかしその「真摯」さが同時に、「婦人公論4冊分」の体験談としてのみ「聞き取られる」危険がある。むしろそういう「聞き取り」のありかたの優位性ゆえに、セクシュアリティ -- それもまた、ある文化的な枠組みに囚われた概念であるという批判もある -- については特に女性からは「語りにくい」または「語られていない」ものとされてきたのではないか。「よりよい」セクシュアリティについての「語り」をするだけで、セクシュアリティの「語り」は「よりよい」ものとはならない。その「語り」を「聞き取る」という実践においての、「構造」とは、また「個」とは何か。それはまた「主体」という問題とどうかかわっていくのだろうか。

森岡氏と江原氏のやりとりに対する、フロアーの投げかけは、まさにその決められた枠組みとしての「聞き取り」に回収される危険を敏感に感じとった発言であり、語りを一旦ストップさせたことは、まさにあの場の「聞き取り」を「中立」なもの、つまり安全に聞いてもらえる語りに引き戻す働きをしたのではないか。それと同時にセクシュアリティについて語る際の宛先が不明瞭であることの危うさをも際立たせたのだ。そして私自身は「中立」つまり個々人の利害や感情とは直接には結びつかないことが前提とされる場で、セクシュアリティについて語ることの「不安」を改めて感じたのだった。最初の話に戻れば日倫という場について私が感じ、捉えていたものは先ほどから何度も用いている「中立」という言葉で表現できるだろう。つまりここでの「中立」とは、個が不容易に引き出されず、真摯に話しをすればそのまま透明に聞き取りも為されることが前提とされたものであり、それゆえその場にいる者への「安心」という感覚を生み出すという働き的前提をも指す。しかし江原氏の取り上げた事例に対しその中立性を求めることは、一方ではその中立性を成立させる前提によって彼女の発言を封じてしまう事態につながる。しかし他方、そのような「個」を出すことはある枠組みでの「聞き取り」の暴力に晒されることにもなる。

あの発表のなかで個を出すことと、出さないことのせめぎあいを感じたのは私だけだろうか？この「中立」というものが語られる内容によっては自明でも、保証されたものでもないということを改めて認識する上でも「時流」という理由以外に「日倫」という〈場〉にセクシュアリティが入り込むという意味が見いだせるのではないだろうか。

(くりたりゅうこ・博士前期課程)